

浄

monthly
JŌDO

土

January 2008

1

法然上人鑽仰会





人の手より物を得んずるに、
すでに得たらんと、いまだ得ざると、

いづれか勝るべき。

源空はすでに得たる心地にて、

念佛は申すなり

「つねに仰せられける御詞」七四五

鬼海弘雄

『浄土』2008年
年間表紙写真の 

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年『India』みすず書房1992年『や・ちまた：王たちの回廊』みすず書房1996年『東京迷路』小学館1999年『印度や月山』白水社1999年『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年『Persona』草思社2003年『べるそな』草思社2005年『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マルタ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年『東京夢譚』草思社2007年『集合住宅物語』みすず書房2004年（撮影・鬼海弘雄 文：植田実）『メッセージ』樹立社2006年（撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ）

浄土

2008/1月号 目 次

もっとも急ぐべし、励むべし.....	若林隆壽	2
法然と親鸞(その四)	田島 栄	8
会いたい人 すまけいさん①	関 容子	16
響流十方	袖山榮輝	24
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	28
江戸を歩く 第十三回	森 清鑑	34
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

若林隆壽

もつとも
急ぐべし、
励むべし
いつを限りと
思うべからず

東京大佛乗蓮寺住職

わかばやしりゅうじ
若林隆壽

脳の中の「物差し」

無常念々むじょうねんねんに至り

老少ろうしやうきわめて不定ふじやうなり

病やまひきたらんことかねて知らず

生死しやうじの近づくこと誰かおぼえん

もっとも急ぐべし 励むべし

(法然上人『念仏往生義』)

ついこの間「平成」になったばかりだと思っていたのに、いつのまにか二十年のお正月を迎えました。おぎゃーと生まれた赤ん坊が成人するほどの年月が経たとうとしています。日本人の四人に三人がいわゆる「戦後生まれ」になり、その「戦後」ですら、もはや映画で懐かしむ「古き良き時代」となりました。私もその「戦後生まれ」の端くれですが、「昭和でいうと今年は八十二年だね」などとまだまだ亡くした子供の歳を数えるように過ごしています。しかし気付いてみると、昔から「光陰矢の如し」「歲月人を待たず」というものの、最近の一年の過ぎ去る速さの何と早いことでしょう。

ある学説によると、人間は脳の中にその人なりの目盛りのついた「定規」じやうぎ「物差し」ものさしを持っており、しかもその「定規」は、年齢を重ねるに従って伸びていくといっています。

生まれて一年目、満一歳の子にとって、一年という月日の長さは、その子の人生すべてであり、それを測はかるには「定規」を端から端まで全部使わなければなりません。ところが

二歳になれば、一年は人生という「定規」のたちまち二分の一になります。成人すれば二十分の一に、還暦かんれきで六十分の一、八十歳、そろそろ極楽ごくらくが近くなってきたなと思う頃には、一年は、一歳の時の八十分の一にしか感じられなくなってしまうというのです。

そう考えれば、年を取るにつれて、年々一年が経つのが早くなるような気がすることになっとくも納得がいきます。小学校の同窓会で、何十年ぶりかで母校を訪れると、机も椅子も教室もみな小さくなってしまったような錯覚さくかくに陥おちいります。「もつとずっと大きいと思っていたのに、こんなに小さかったかなー」と誰もが思うことでしよう。実際は机や椅子の大きさが変わったわけはありません。それが脳の中の「物差し」が伸びるということなのです。

ところが、この「物差し」が伸びるということ、一年が経つのを早く感ずるようになるということは、実はそのまま生が死に近づいていることにはかならないのですが、さて、いざ自分のこととなると、「まだまだ大丈夫、自分に限っては」と考えてしまうのは、どうやら八百年前の法然上人の時代から、少しも変わらないことのようにです。

「すべてのものが移り変わっていくことは、この一瞬一瞬に起きていることなのに、年齢の順に死が訪れるとは限らないのに、いつ病が襲ってくるかもしれないのに、死が刻一刻と迫っていることに、いったい誰が気づいているでしょうか。さあ、本当に急がねばなりません。お念仏に励みなさい」

法然上人のこのお言葉は、日常に追われ、自分の置かれた位置を見失いがちな私たちの心にも直接響いてきます。

人の記憶は「玉入れ」

たとい七八十の令を期すとも、

思えば夢の如し。

いわんや老少不定なれば、

いつを限りと思うべからず。

さらにその後を期す心あるべからず。

ただ一筋に念仏すべしということ、

その謂われ一にあらず。

（法然上人『十二箇条の問答』）

人間の記憶は「結晶記憶」と「流動記憶」との二種類に分けられるといえます。もちろんその中間に位置する記憶も多くあるのですが、「三つ子の魂百まで」というように、小さい頃から反復して、習慣と呼べるほどとなっている記憶、まだ脳が若く、十分に柔軟な時代に取り入れた記憶は水晶玉のようにしっかりと残っていく、それが「結晶記憶」です。一方、「なくすといけなからちやんと仕舞っておこう」と思って仕舞ったはずが、その場所が思い出せない。顔を洗うのに眼鏡を外すと、さあ、洗い終わった後でその眼鏡が見つからない、眼鏡がないとよく見えないから万事休す、などという、一定の年齢に達した方には、誰にも身に覚えのある、自然と流れ出してしまう記憶が「流動記憶」です。

人の記憶は、運動会の「玉入れ」、紅白の「玉」を投げ入れる「玉入れ」を想像すると

解りやすいのだそうです。

人間の脳の中に、記憶を貯めておく大きな「籠」がある。その「籠」に向かつて、色々な経験や覚えておかなければならないことの「玉」が次々と投げられる。うまく「籠」に入って記憶として定着するものもあれば、これは覚えておかなくてはならないと思っても、上を素通りしてしまうものもある。

そうして、年を重ねるに連れて、その記憶の「籠」は段々に一杯になって、ついには溢れ出してしまふ。そして、その「籠」が壊れる時には、底が抜けるのではなく、上の方から破れていく、これが「新しいことが覚えられない」「昔のことなら、小さいときのことならよく覚えている」ということになるのです。

私の母は、今年米寿を迎えます。数年前、脊椎を痛めて歩行が困難になってから、いわゆる「認知症」の傾向が出てきました。女学校時代からのお友達と、戦前・戦中・戦後のことを、二人して何時間も「あの時はお互いに苦労したわねー」などと話していたのに、その方がお帰りになつて五分と経たないうちに「今、誰か来ていたかしら」となります。

母が小さい時からある割烹旅館、四代目のご主人が、初代から脈々と受け継いできた味の煮物を下さると、「そうそうこの味なの、あそこのお店の里芋はね……」とひとしきり講釈が続きます。ところが食べ終わってしまうと、「私、ご飯済んだかしら」と一言。「結晶記憶」と「流動記憶」の違いをまざまざと見せてくれます。

「たとえば、普通の人の平均寿命をはるかに超えた七十歳、八十歳の生涯が期待できるとしても（法然上人の時代の平均寿命は、せいぜい四、五十歳だったでしょう）、思えば夢のように過ぎてしまふものです。ましてや、死というものは老若順番に訪れるわけではあ

りません。自分はいくつまで生きられるだろうなどと考えるはいけません。さらに元気で過ごせる老後などを期待したりしてはいけません。ただひたすらにお念仏を申しなさいという理由は、一つだけではないのです」

法然上人は、ご自分の周りにいる若い人たちが、安閑^{あんかん}として日々を過ごしてしまうことを、心底心配しておられたのでしよう。このようなお言葉で、ことあるごとに諭^{さと}しておられます。

今、政財界はもとよりスポーツ界、一般社会でも、目に見える形での「けじめ」が求められています。その諸悪の根底にあるのは「いろいろな物が手に入りやすくなった分だけ、たった一度きりの人生を大切にしない生き方が蔓延した」ことです。

人は年齢を重ね、経験を積みながら「物差し」を伸ばしていきます。そうして多様な価値観を身につけていくはずなのに、「自分自身を省みない」「目先の利益に囚われる」「自分だけちよっと得をしたい」「病や死は他人事^{ひとごと}」などの傾向は、昔から変わらないどころか、ひどくなっていくばかりのように感じられます。

新しい年を迎えたお正月。「古き良き時代」を知る人にこそ、「もっとも急ぎ、励む」とが求められているのではないのでしょうか。

法然上人鑽仰会

公開講演会

法然と親鸞

脚本家

田島 栄

その
四

第二幕の第一場は法然上人の吉水の庵室です。

仏教を万民のものとし、また女人往生をはじめて説いた法然を慕って、あらゆる階層の老若男女が法話を聞きに集まり、念仏を心の支えにして暮しの中に生かしていきました。

今日も法然は集まった人びとに、にこやかに語りかけます。その話はどんな名僧の話よりも実際の生活に即していて、お経も知らず文字も読めない庶民にもわかりやすいものでした。

「子供が親よりも先に死ぬのは罪だと聞きますが、本当でしょうか」「この世にはよくあること、人の力の及ばぬことがなんで罪になりました」「月のもののあるときは、お経を読んではいけないのでしょうか」「いいえ、さしつかえあるとは思えません」

遊女の山吹と琴路が法然の前にひれ伏します。「お上人様、私共のような罪深い者の救われる道はあるのでしょうか。どうかお教えくださいませ」「私のようにけがれた賤しい女にも、み仏のお慈悲はあるのでしょうか」「おのれを卑下してはならぬ。わたしもあなたの方のために念仏を申しましょう」

南都の法師武者が叫びます。「邪法なり・法然御房の説は愚民をたぶらかすものぞ」

法然は言います。「私は父の遺言と母の願いにはげまされて出家しました。今でも、たとえ一日として、私は母を忘れない。しあわせにしてあげたかった。だから不幸な女性を見ることはつらい、たまらなくつらい……」

往年の勇士、熊谷蓮生が久しぶりに訪ねてきます。「われらと共に戦場を往来し、倒れた友の魂、また怨みをのんで亡びた敵の霊は、いったいどこをさまよっているのをごさいますしょう。かれら敵味方幾多の靈魂をどうしたら救うことができましょうか」

「よくぞ申された。熊谷殿、人間が憎み合い殺し合う戦は悲しみてもあまりあることじゃ。

すべての人が弥陀の本願を知り念仏を称える心になれば、このようなあさましいことはなくなろう。そのときはいつかこよう、いやきつとくる。その日を招来させることを願ってわたしは念仏申している。そなたは修羅の巷をさすらい現世の地獄の恐しさを見てきた。共に手を取りあつて念仏を称えよう、亡き人びとの思いを忘れず、後の世の人びとのしあわせのために……」

実は、私はこの劇を書くときに、まず沖縄と広島、長崎へ行つて戦争の傷痕をじっくりと眺め、亡くなられた方がたに祈りを捧げてきました。昨年の夏には子供や孫たちをぞろぞろ引き連れて広島へ行きました。出費はこたえましたが、孫たちを塾へやるよりも、見るべきものを見せておく方が先だと考えたからです。

この場面では聖光上人が九州へ旅立つて行きます。

「聖光御房、そなたにはわたしの知るかぎりのことをみな伝え終えた。すみやかに鎮西へ帰り念仏を弘めよ」

「かしこまりました。鎮西の布教は私のかねてからの念願でした。お許しがでたうえは誓つて御高恩に報います」

夕闇が迫る中に、範宴（後の親鸞）が現われて、法然に向つて合掌します。

「範宴と申す者にごさいます。此度お上人にぜひともお願い致したき儀あつてまかりこしました」

法然と親鸞、この二人の心のふれあい、劇の一つの要でもありますので、出合いの場面はしっかり書いたつもりです。

範宴は九才の時に出家し、二十年間、叡山で学び、血のにじむような修行を続けましたが、煩惱をたちきり悟りをひらくことができず、迷い苦しみ山をおりて、六角堂にこもつ

て百日の間求道の祈願をしました。その九十五日目の明け方、夢の中に聖徳太子のお告げをうけて、この吉水を訪れたのです。範宴は心のありのままをうちあけて法然にすがり、教えを乞います。仏法の真理とは。人間の真実の生き方とは……。

法然は静かに語ります。

「あなたのなされた学問や修行はわたしにも難しすぎた。わたしの知ることといえは、本願を信じてただひたすらに念仏申すこと、この他には何もありません」

「ただひたすらに……」

「南無阿弥陀仏と声に出して称えることです」

「声に……、称名念仏でございますか」

「おのれのはからいを捨ててすべてをみ仏の心にまかせる。われら乱想の凡夫にとって、称名の念仏こそ弥陀の本願にもっともかなった行いです」

「眼がさめました……今のお言葉を聞き、ようやく念仏のまことの心がわかりました。私のような愚かな身には、念仏の他のどのような修行もかなわぬこと、この上は、たとえお上人にすかされまいらせて、念仏して地獄へおちようとも、けっして後悔はいたしません」

「あなたはまっすぐなお人だ。少しもおのれを飾ろうとしない」

「いいえ、身を飾るほどの知恵もなく愚かなおのれに恥じ入るばかりでございます」

「よくぞ気付かれた。聖道門の修行は知恵をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は愚痴にかえりて極楽に生まれる」

「愚痴にかえる……愚かなおのれを見つめ続ける……」

二人の話は続きます。そして互いに手を取合い、共に念仏の中に生きてゆこうと誓うのでした。法然上人六十九才、親鸞聖人二十九才の時のことです。

一方、専修念仏のひろがりと共に、念仏者の中にも、念仏のまことの心を知らず、法然の教えを歪めて解釈し、他人にも間違った法を説き、風紀を乱すなど、行きすぎやあやまちを犯す者があらわれます。すると、それを口実に念仏を弾圧しようとする聖道門諸宗の動きもはげしくなってきました。

そこで法然上人は門弟を集め、一つには諸宗の誤解をとくため、また一つにはみずから反省してあやまちを正し、まことの信心を築くために、念仏者が守らなければならない七つのいましめを書いて示しました。これを『七ヶ条しちかじょうの制誡』といいます。

次の場面も吉水の草庵ですが、前の場面から幾年かの年月が過ぎていきます。

法然上人が愛弟子の源智に語りかけます。

「源智、わたしと会ってから何年になるかな」

「十年になります」「もう十年か……」

「お師匠様、お淋しい時がございますか、身を切られるように淋しくてたまらないことが……」

「淋しいから念仏を称える。源智、そなたたち親子は源平の争いでひきさかれた。そなたは別れた母上のことを思っていたのであろう。これを見なさい。私の母の手紙だ、もう三十年よりも前になろうか……」

「三十年も、肌身離さずに……」

「うむ、母といっしょに念仏を称えてきた」

「お師匠様……」町女房風の女が訪れます。

「お上人様！」

「おう、そなたはいつぞやの……」

「山吹でございます。お会いしとうございました。賤しい勤めからどうにか抜け出し、今はささやかながら壬生の方で商いをしております。これもあの時のお上人様のお話のおかげでございます」

「それはよかった、よかった。しかし、あれからさぞ苦勞をなされたことでしょう」

「はい……」

「朋輩の女性はどうなされたかな？」

「琴路さんは病いでもなくなりました。でも、お上人様のおかげで極樂へ行けると、穏やかな顔に笑みさえ浮かべて、お念仏を称えて……」

「そうか、そうでしたか。皆も聞いたか、なんと美しい話ではないか。琴路は苦海の底で泣きながらも、念仏を信じて生き、み仏の浄土に迎えられて往ったのだ。わかるか、往生とは死ぬことではない、往って生きることなのだ。永遠の命を信じて生きぬくことである」
「お上人様、ありがとうございます」

遊女山吹は涙をおさえて去って行きます。

私はここで情の法然を描きたかったのです。偉いばかりではない、きびしいだけではない、優しいあたたかい心の人、私たちと身近で親しい法然上人を大勢の人びとに見てもらいたくなっただけです。

親鸞聖人も入門以来何年も、そういうよき師の下で学ぶ中で信心を深め、『選択集』の見写を許されるまでに成長してゆきました。

念仏の声はますます盛んになり、ひろがってゆきます。一方、諸宗が衰えてゆくのを憂えた興福寺の衆徒たちは、境内に群れ集まり合議しました。

そして、旧仏教の立場から「念仏の宗門には九つの失がある」と浄土宗を批判し、「専

修念仏を禁止し、法然およびその門弟たちを重罪に処するよう」朝廷に訴え出しました。

このような時に、門弟の安楽と住蓮が、後鳥羽上皇の側近く仕える松虫と鈴虫という名の女性を尼にした事件は、火に油をそそぐ結果になりました。安楽と住蓮は役人に捕えられ、安楽は六条河原で、住蓮は近江の馬淵で、高らかに念仏を称えながら首を斬られます。そして舞台は第二幕の終りの場面を迎えます。九条兼実の別邸です。

迫害はいよいよはげしくなり、今は吹き荒れる嵐から、どうしたら念仏の灯を守りぬくか、門下の人たちはけんめいでした。

そこに勅命が告げられます。安楽と住蓮に続いて善綽、性願は死罪、法然は土佐へ親鸞は越後へ流罪という決定です。他にも数人の弟子の名が流罪の中にあります。

建永二年（一二〇七）二月、世にこれを「建永の法難」といい、時に法然上人七十五歳、生涯最大の試練にあわれたのです。

弟子たちは衝撃をうけますが、法然はびくともしません。

「この法の弘通は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず……」

「今のお言葉を聞き、親鸞喜んで流罪の地へ赴けます。ただ師の御房と同じ土佐でないのが残念……」

「それでよいのじゃ。聖光御房はすでに鎮西にあって念仏を盛んにし、金光御房ははるかみちのくを旅して広めている。そしてこたびは、そなたは越後へ、私は土佐へ、この国のすみずみまで念仏をひろめるにはまたとないよき機縁ではないか」

「誓ってお志にそい、雪国に念仏の華を咲かせます」

親鸞は旅立って行きます。あちこちに法然上人との別れを惜んですすり泣きの声がおこります。

「皆さん、何も歎くことはないのだ。念仏を申す者はたとえ千里の海山をへだてて住もうとも心は一つ、浄土での再会は疑いない。どうか、くれぐれもその日までお身を大切になされるよう……。念仏を称えるとき、阿弥陀仏はむろんのこと、釈尊も善導大師もこの源空もあなたの側にいます。わたしに会いたくば念仏を称えなされ、念仏を……」

老師にはげまされて、人びとは念仏を称えます。しかし念仏停止の宣告はすでに下されたのです。さからってはさらにどんな大きな災難がふりかかるやも知れません。

弟子の西阿は「やめて下され！ お師匠様、今この時にそのようなお話はゆめゆめ申しではありませんぬ。お命にはかえられませぬ」と必死にとどめます。しかし、法然上人はたじろぎません。

「わたしは、たとい死刑になろうとも、この事だけは申さずにおられぬ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」このお言葉は法然上人伝全篇中の白眉です。

真理はわれにある・仏法の真理を貫くためには死をも恐れない・その強い信念の底には人間への熱い愛情が燃えたぎっています。

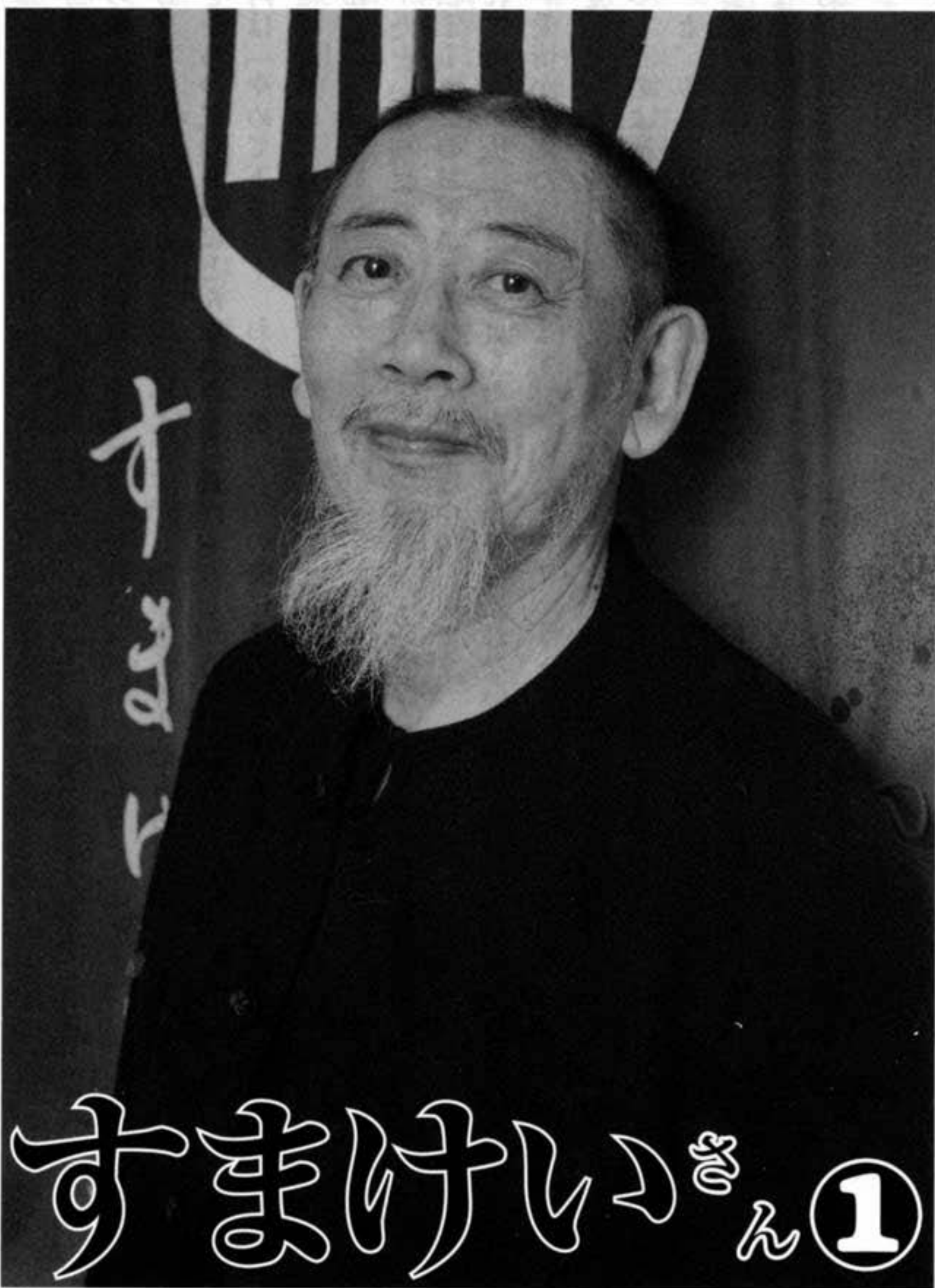
私の言葉を信じ、念仏を生きる心の支えとする人びとを、私は殺されても見捨てはしない――。いつ、どのような時でも、念仏を称える人びとと共にあり、ともに生きる、未来永劫に……。と、みんなに約束なされたのです。

このお言葉に、弟子たちも、檀信徒たちも、すべての人びとの胸に感動がわきあがり、誰からともなく称えだした念仏が、地鳴りのような力強いどよめきとなっていく中で、第二幕の幕がおりていきます。

(つづく)

連載

会いたい人 関 容子



すまけいさん①

撮影／タカオカ邦彦

すまけいという俳優の舞台を観て、私がりわけ強い印象を持ったのは『父と暮せば』（井上ひさし）の父親役。広島の原爆で一人生き残ったという罪悪感から娘が生きる勇気を失いかけると、死んだ父親がどこからともなく現れて励ます。まずは押し入れの中から登場だったが、ギロリと光る大きな眼には、凄味と茶目っ気と優しさがいい具合に入り混じっていて、たちまち人を魅きつける力があった。

ほかに井上作品では、『きらめく星座』とか『人間合格』とかに出演しているすまさんにいつも注目していたが、ここ何年かほかの舞台では見るものの、こまつ座の芝居にその姿が見られず、物足りない気がしていた。

最近、あるホテルのラウンジで井上ひさしさんに偶然お会いしたので、すまさんについて伺うことができた。

「すまさんがアングラの帝王と呼ばれていた60年代のころ、新宿のあちこちで『すまけい

とその仲間』の公演を観て、ぼくはすまさんの追っかけになったんです。いい役者がいるなと思って、いつかこの人に書きたいと思ったら、いつの間にか解散してその後消息不明になった。それでずいぶんたってから、ぼくの前の奥さんだった人が、芝居のプロデュースをやりたいと言い出したので、じゃあ、すまけいを探し出して出演交渉に成功したら、快く協力しようと言ったら、本当に探してきました。NHKのプリントセンターという、台本を作る印刷所に彼はいたんですね。それでまず『日本人のへそ』の教授役、それから次々にぼくのいろんな芝居に出てもらいました。とにかくすまさんの芝居というのは、作中人物の中へぐっと入りこんで行って、ひとまずそれを創造的にこわすんですよ。そして元からそこに棲んでるみたいな人物になって生き生きと登場してくる。すごい役者だと思いますね。ぼくがあまりに遅筆なので、それじゃあちゃんと稽古ができない、って怒ったんだ

国後島作喜国民学校の教室にて。後ろは日の丸。3〜4歳の頃か



と思うけど、出て行かれちゃってね。とても残念なんです」

井上さんの話に出た「すまけいとその仲間」について、私は噂としては聞いているが、口惜しいことに観ていない。総勢三人のこの劇団は、新宿の深夜スナック、駐車場、麻雀屋の二階などを舞台にして、観客の中に飛びこみ、ぶっつけ本番の体当り演技で人気を博し



中標津中学校一年生のすまさん（右から二番目）

ていたという。

それでようやく私はすまさんに会って、話を聞くことができた。

「井上さんがそこまで言ってくださったとは有難いね。あの人、褒め上手で、頭いいからね。だから作家になったんだね（笑）。俺ってちよつとおかしなところがあつて、田舎もんなのにヘンに江戸前で怒りっぽくて、偏屈だからね」

と、まず牽制された。

すまさんの本名は須磨啓。啓はあきらと読む。昭和十年、北海道の国後^{くなしり}に生まれた。

「正確に言うと、国後郡泊村^{しほり}大字喜名尻^{きなしり}字キナシリ小字ポンキナシリ（笑）。小学校だけでも転校が三度、流れ者だよ。親父さんが小学校の校長だったから、何度も転任した。ぼくはまず北海道の東の端、教室が三つ四つしかない分校のような野付^{のつけ}小学校に入学して、それから内陸の中標津^{なかしべつ}という大きな町に移つ

てその小学校へ。校長の官舎というのが二部屋くらいあつて、家族はそこに住んでるわけ。休みの日、親父が外出すると、職員室にしのびこんで、『グリム童話』とか、いろんな本を読みふけたね」

その中で最もすまさんを魅了したのが『現代漫画大集』。昭和三年刊行の全十二冊だった。

「クロス張りの分厚い立派な本でね。漫画と言つたつて岡本一平とか、池部均つて映画スターの池部良さんのおとつあんの画家が筆描きした絵で、カリカチュアつて、いわゆるポンチ絵だとか、社会諷刺の戯画だけどね、ほかにも坂本繁二郎とか川端龍子とか河鍋暁斎とかの絵もあつて、みんな若いときは漫画で食いつないでいたんだろうね。どれも趣きがありましたよ。近ごろの小汚いマンガとは大違い。今の連中は頭が悪くて字も読めないもんだから（笑）、絵でわからせようというんでやたらマンガに頼るけど、とても見られた



昭和39年頃のすまさん、いまでいう超イケメン

もんじゃないね、安っぽくて」

すまさんのアングラ時代の芝居は、まるでジャズの即興演奏のようにその日の気分で転開していく、と聞いたことがあるが、それよりもむしろこのカリカチュアの世界にルーツがあつたのではないだろうか。ふとそんな気がした。

「まさにそれなのよ。新宿のデザイン学校の先生が、俺の芝居に興味持ってくれて、自分が経営してるスナックで芝居していいよ、って使わしてくれたんだけど、その人が言ったことで嬉しかったのは、さすがに美術の先生だね、君の芝居観てるとあの本を思い出させるね、って。それが『現代漫画大集』のことだった。そんなもの知ってるのは俺以外ない、と思ってたからびっくりしたし、嬉しかったね」

すまさんは少年のころ、父の蔵書の中から手当たり次第、本を読んだ。その成果として漢

字の書き取りはいつも一番だったとか。

「親父は弁護士か何かになりたかつたらしくて、法律関係の本が山ほどあつたけど、そんなものにもちろん俺は興味ない。教育者だから真面目でね、戦争中はぼくもずいぶん理不尽な目に遭わされた。ジャンケンホコホコ北海道、アイコでアメリカヨーロッパ、なんてみんなで歌ってたなら、この非国民！　と言われて、代表でぼくが張り倒されたんだからね。校舎の脇に奉安殿ごしんえいというのがあつて、そこには天皇の御真影ごしんえいというものの、つまり写真が入ってる。観音開きの扉にいつも鍵がかかって、元旦と、天長節と、紀元節と、明治節なんかの朝になると、親父はモーニングを着こんで、ピカピカに磨いた黒靴をはいて、真っ白い手袋をして、まるで手品師なんだ（笑）。何遍も何遍も最敬礼して、紫の伏沙を掛けた御真影を取り出して恭々しく頭上にささげ持つて戻ってくるんだけど、何だか滑稽で、親父のその姿を見るのがいやだったね。伏沙の

中から鳩でも飛び出さして見せてくれれば恰好いいし、拍手大喝采なんだけど」

そして軍国少年たちは起立して『海行かば』を歌わされる。

「俺、この唄はカバの唄かと思ってたね、いやほんと(笑)。海行カバ 水漬^{みづ}くカバね 山行カバ 草むすカバね、だもんね。もう一つわからなかったのは、大君の辺にこそ死なめ、というのが、オオ 君の尻、に聞えて(笑)、疑問だった。それと、ナナメという渾名の子がいたから、へにこそ死ナナメエ……と声張り上げてね。まあ、つまりは悪ガキだったわけですよ」

こういう場面も何となくすまさんのアングラ芝居に影響をもたらした気がしてくる。

「終戦後は、親父が秘密に読んでたカストリ雑誌の類い、『りべらる』とか『ロマンス』とかをぼくも愛読しましたね。下山国鉄総裁は他殺か自殺か、なんていうのも興味を持って読んだ。それから菊池寛の『恩讐の彼方へ』

とか『父帰る』も夢中で読んだ。中学生のとき、学芸会でこの『父帰る』を上演してね。落ちぶれて帰ってきた父親を冷たく突っぱねる長男健一郎の役がぼく。あのころ北海道の片田舎の中学ではみんな丸坊主で、髪を伸ばすのは禁止だったんだけど、学芸会当日まで一か月だけは伸ばすのを特別に許可されて、五分刈で舞台に立った。観客のオバサンたちが泣いてくれて、それが快感でね、しばらくの間は役者のつもりで過しましたよ」

中標津中学、高校を卒業し、すまさんは大学へ進学する。

「何か理由をつけて家を出たかった、解放されたかったんだね。一応長男なんで、親も許してくれて、でも北大とか小樽の大学とか近くを受けるのはやめて、金沢大学とかなるべく遠くの大学を受けたら、たった一校、富山大学だけ合格した。これも国立だからね、親は喜んで寮に入れて仕送りしてくれたんだけど、すぐに不良化して……」

そのあとの言葉がはつきり聞き取れず、え？ ア力に？ ああ、赤になったわけですね。

「赤になった、じゃないよ、赤線だよ(笑)」。そこに入り浸ったわけ。そのころ国立大学の授業料は一年間で五千円くらいなのに、俺は六万とか七万とか送ってもらってた。泊った店で朝、そこのおなごと一緒にゾロリとドテラを着て、茶を飲んだりして得意になってね。そのドテラひっかけてたまま大学へ行って、ドイツ語の講義に出たりして、いい気なものだった。完全に道をあやまったね。店には学割にしてもらって千円くらいで上がったんだけど、年中だから金が足りなくなつて、それでも行きたいから、怪我したとか何とか親に言つてやる。一年半くらいたつたところに、さすがに親もヘンに思つて、これは友だちが悪いらしい、つて、てめえが悪いんだけどさ(笑)。罰が当つて病気になつて、ひどい目に遭つたときだしね、自分の力で治す度胸はなかつ

たから、親に強制的に引き戻されて、多分それでよかつたんでしよう」

すまさんは富山大学在学中、演劇部の友人が、富山城趾公園で『こわれがめ』(クライスト)を上演するのを観て、芝居つてやつぱり面白い、とつくづく思う。

「昭和三十二年ごろ、今度はお袋と弟つきで東京へ出て、お茶の水の文化学院に入つたんです。その同級に吉岡治がいた。のちに作詞家になつて、『天城越え』とか、ヒット作を書いた艶歌の巨匠になつたやつ。当時サトウハチローに師事してました。その吉岡が書いた放送劇をやつて、ラジオの創作劇コンクールに参加して、一回優勝したことがあつて、これが役者への道のとばくちだった」

ここで味をしめたことが、すまさんを演劇の道に誘ひこむ決定打となつたのだろう。

(つづく)

舍利弗。かの土を何が故で、名づけて極樂とする。その国の衆生、衆もろの苦あることなく、ただ諸もろの樂のみを受く、故に極樂と名づく。

（『仏説阿彌陀經』）

舍利弗よ、阿彌陀仏の世界をどうして「極樂」と呼ぶのであろうか。

それは、その世界の人々には、苦痛や苦惱を受けることがまったくなく、たださまざまな幸福のみに包まれているからである。それ故「極樂」と呼ぶのである。

ビビリ屋さんの引っ掻き傷

瘡蓋の取れかかった傷が痛痒かった。手の甲を猫に引っ搔かれた痕がである。それは昨秋のこと。実家である某寺院に帰った私は、いつものように二階の居間に上がっていった。そこには仏壇がある。まずは亡き祖父や実父に掌を合わせるのである。それが、かれこれ一年半になろうか、実家の掟に「二階の居間を開ける時は猫を逃がさないように気を付けろ」という一条が加わった。

というのも、兄たち家族が猫を飼い出して以来、二階の居間とそこにつながらっている甥姪たちの部屋とが猫の生活スペースになったからである。

その日も私は、注意深く居間に入りお参りをすませた。はじめ猫はいなかったが、鈴の音に誘われたか、仏壇の脇にすーっと純白の猫が現れた。一歳半の雌猫、シロである。

彼女に会うのは、これで何度目だろうか。彼女は私に近付き足の周りを一周すると、家人がいらないせいか警戒して、いささか私から距離をとった。

まだ懐いてくれないのかなとシロの目を見る。すると一瞬、まんざらでもなさそうなので、トントンと指先で床をならしてみた。じつは私も子どもの頃、実家で猫を飼っていた。かまってみればじゃれてくれるはずと思ったのだが、それは私の思い違いだった。シロは背中を丸めて毛を逆立てるや、あつという

間に近付いてきて、私の手の甲を引っ掻いていったのだ。

ところで義姉に言わせれば、シロは「世間知らずの箱入り娘で、ビビリ屋さん」だそうだ。シロは実家の境内をうろつく野良猫の子であるという。ただ、どういうわけか生まれてすぐ親猫からはぐれてしまったらしく、今にも死にそうなほど衰弱していたところを義姉が見かねてシロは一命を取り留めた。

親が分からない子を野良猫に戻すわけにもいかない、兄たちはそのままシロを飼い出したのだが、シロは猫として生きる術を学べぬまま成長している。経験は兄たち家族との触れ合いだけ。何が危険で、何が安全なのか分からないことだらけ。臆病なビビリ屋さんで当たり前なのだ。

私がシロをかまおうとした時、居間にはシロと私しかいなかった。シロは怖かったのだろう。不安でたまらず混乱していたのだろう。私が指先で床を鳴らしてみたのを合図に、シロの不安と恐怖は爆発したに違いない。

シロには、シロにもそれが何だか分からない不安や恐怖がたくさん渦巻いている。兄たち家族には心を開いても、他人にはなかなか警戒心を解けないでいるのは、きっとそのせいなのだろう。

シロは戦っているのだ。自分を取り巻く巡り合わせの中で生じたわけの分か

らない不安や恐怖といつも戦っているのだ。ときに、その緊張に耐えきれず、苦し紛れに攻撃的になったりするのだ。

でも、それはシロに限ったことだろうか。

この世は諸行無常であるという。ときには耐えきれない悲しみがあり、思い通りにならない苦しみがある。でも誰もが安らぎを得たくて諸行無常と戦っているのだ。もちろん勝ち目はない。でも、だからこそ義姉がシロを見捨てなかったように、戦いにもがき苦しむ私たちを哀れみ悲しんで下さる人はいるはずなのである。それが諸仏諸菩薩である。

なかんづく阿弥陀さまは、私たちにはもうこれ以上苦しむことがないよう誓われ、私たちが安らいだ幸福に包まれる世界「極楽」をお建てになられた。

「極楽は有る無しじゃないんだ、なければいけないところなんだよ」と聞かされたことがある。生きとし生けるものの悲しみを見つめればこそ、阿弥陀さまは慈悲をめぐらし極楽をお建てになられた。それが真理なのである。

もし阿弥陀さまの手の甲に傷跡があったならば、それはきつと「ビビリ屋さん」たちの苦しみ悲しみを受け止めた証に違いない。

法然上人
とその時代

シリーズ第四章

第四回

作

壇ノ浦へ

石丸晶子

画
アーサ



十

海上に影を落とす月光をながめながら、彼女は今、一の谷の合戦の前夜、夫通盛が平家の陣屋に彼女を呼び出した時のことを思い出していた。合戦前夜の慌しさの中、思えば最後の臥所のなかで、夫の愛撫を受けつつ小宰相は、ただひたすら阿弥陀仏の本願を信じ、念仏して戦場に臨むことを勧めたのではなかったか。

それは上西門院に仕える女房であつた彼女が、この女院に招かれて教えを説きに御所に来た法然上人から、直接受けた教えであつた。法話の席に小宰相もいたのである。

厳しくも慈愛に満ち、みずからを律することまた厳しいと伝え聞いた法然上人の、光につつまれているとしかいいようのない姿。

過ぎ去つたかの日の法話の席のこと、そこで見、そして聞いた法然上人の姿とその教えのことが、今、船端に寄る小宰相の心にはつきりと蘇っていた。

たしかに、乳母がいうように

「六道四種、死してもどこに生まれ変わるかわからない」

とも聞いていたけれど、お上人は

「弥陀仏の本願を信じ、心から念仏を称える者を、弥陀は一人たりとも見捨て給わず、必ず浄土へ往生させてくださる。六道に彷徨わせ、捨ておかれることは決してない」

とお教えになつたではないか。

そう仰せられたあのみ姿、あのみ声が思い出される。

世にまたとない高德の聖であられた……最後となつた臥所でのわたしの願いを、夫も必ず信じて念仏されたにちがいないのだ。夫が六道に彷徨つてなどおられるはずはない。お上人のみ教え通り、必ず浄土に往生してわたしを待っておられるであろう……

風も静まつた夜半であつた。小さな波に揺られて、月光が海面にさざめいている。

小宰相は西とおぼしい方角に向かつて合掌した。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

―阿弥陀仏、御本願を信じ、一心に念仏するわたくしを必ず浄土に迎えとり、飽か^あで別れた夫通盛と必ず出会わせ給え。

念仏するうちに、悲しみに昂揚した気持ちは静ま^まっていった。

小宰相は一心に念仏を続けた。

「夫と出会わせ給え。同じ蓮に出会わせ給え。

なむあみだぶつ……」

声とともに、やがて小宰相は身を翻し、海中に沈んでいった。

源平盛衰時代、建礼門院（清盛の娘で高倉天皇の中宮平徳子。安徳天皇母）に仕えた女房の日記に『建礼門院右京大夫集』がある。

有名な日記だが、この中に小宰相のことが記された一節があつて、それによると、小宰相は上西門院に仕える女房の中でもきわだつて美しい女性であつた。

右京大夫はこう記している。

「女房たちは、みなそれぞれに美しかったが、

小宰相という人の美しさはその中でもきわだち、ゆたかな黒髪が額のきわにかかった姿など、目が離せない美しさであつた」。

しかし、その美しい人は今や海底深く身を投じてしまった。

入水した水音に梶取りが気づき、やがて夜更けの船内は大騒ぎになつたが、すべては遅かつた。

悲しみに悲しみを添えて、しかし船はそのまま屋島をめざして進んでいった。

十一

生き残つた平家一門の人々が屋島に帰り着いたのは、小宰相が海に身を投げてから二日後のことである。

屋島は現在、高松市の北東、瀬戸内海に突き出た半島で、南北五キロ、東西三キロ、標高二九三メートルの台地であるが、源平時代の屋島は四国本土との間に干潟が広がり、干潟北方の海中に浮かぶ小島であつた。

木曾義仲の大軍に追われて都を落ち、まず

九州太宰府に向かった平家は、三月みづきののちにはそこにもいられなくなって四国の屋島に向かったのであった。都落ちが寿永二年（一一八三）七月。屋島に落ち着いたのが同じ年の十月である。

以来、平家はここを本拠地としていた。

屋島では、板葺きながらも安徳天皇のご座所の内裏も造営され、平家一門の屋形も建てられていたが、それは清盛によって取り立てられた四国切つての豪族阿波民部重能あわのみんぶしげよしが、平家を手厚く迎え入れたからであった。

一の谷に敗れた平家は、屋島に帰還し、ふたたび民部重能に迎えられたのである。

しかし、屋島に帰り着くや、彼らに伝わってきたのは、一の谷で討ち死にした一門の公達だちはじめ主だった平家方武将の首が、都大路を引き回され、獄門に懸けられ、加茂の河原は近隣からの見物人で市をなす騒ぎだ、という知らせであった。

後白河院も棧敷を出して見物したという。

内海を行き来する聖ひじりや僧侶たち、商人や漁

民たちによって、都のうわさは幾日もしないうちに、中国、四国の国々にも伝わってくるのだ。

さらに、都の貴族のなかには平家と縁戚を結んでいるものが多く、内々平家に心を寄せている貴族も多かった。彼らがひそかに使いの者に託して都の様子を知らせてくることも度々に及んでいた。

かかる状況の中、生き残った人々が屋島に帰還するや重能の尽力で早速始められたのは、源氏の来襲にそなえ海に向かって堅固な城郭を造ること、小さな島には築城工事の槌音に交じり、四国や瀬戸の沿岸各地から徴発されてきた人夫と彼らを指図する侍たちの声が、終日聞こえていた。

十二

春の夕暮れが始まっていた。

「修理殿」

兄の修理大夫経盛しゅうりだいぶつねもりに、門脇宰相教盛かどわきさいしやうのりもりは声をかけた。今度の合戦で経盛は経正、経俊、敦

盛、三人の子息を失い、教盛は通盛とその妻の小宰相を死なせている。清盛の弟で年長であつた二人は、一の谷の合戦では海上に停泊させた船に留まつていて直接戦いに参加せず、命永らえたのである。

海を眺めて立つ二人の前には、瀬戸の海に浮かぶ大小の島々が夕靄に霞んでいた。

「屋島に帰還して旬日にもなろうとしておりますが、評定に次ぐ評定の毎日、こうして海を眺める暇もありませなんだ」

「穏やかな眺めよ」

と経盛は弟に応えて、

「この景色を眺めていると、合戦のことが夢であつたように思えてくる」

「無情な眺めでござるの。われらにはあまりに穏やかすぎて、却って討ち死にした者たちの無念が思われてならぬ」

彼方の海上へ目を向けたまま、教盛は涙を押拭つた。

経盛は呟くように、

「余りに多くの若者を失うてしもうた。哀れ

よ、哀れよ」

「中納言殿（知盛）などは、もう討ち死にした者の話はなさるな。嘆くよりも、彼らのことをまずは忘れて、今後の戦の段取りに心を用いよ、と評定の席でしきりに言わるるが、われらに忘れてしまわれては、戦死した者は浮かばれませぬ」

「中納言殿はお若い。生田の森ではご嫡子知章殿がお身代わりに戦死されて、一時はいとうお嘆きであつたが、父の身代わりとなられたお子の菩提を弔うよりも、合戦のほうがお気がかりとはのう」

「お若さゆえの剛き心なのよ」

「兄の内大臣殿には、今少し剛きお心が欲しいところだが」

弟の知盛に対して、同じく二位の尼を母として生まれながら優柔不断な兄の内大臣宗盛のことを、経盛はそういった。

「剛きのみで、討ち死にした一門の菩提を弔う心をお忘れとは、東夷（あづまのへ）の武者どもと、変わりはないわ」

東夷、と教盛がいうのを聞いて、経盛の目からふいに涙があふれた。十七歳で討ち死にした子息教盛のことが、突然、あざやかに浮かんできたのである。

「東夷の中にも、情けのわかる侍は居り申した」経盛はいった。

「敦盛は須磨の浦で熊谷次郎直実と申す侍に討たれたが、その侍、敦盛の菩提を弔いたい、というねんごろな書状に添えて、敦盛が着用していた衣装、鎧はじめ武具一つも残さず返し届けてきた」

「その心あつてこそその兵でありますな」

教盛が応えた。

と、経盛は、

「この度の戦で、一度に、子息三人失うて気が弱うなっているのか、この頃思い起こすことは、死して後の世のことよ。平家は前世の因縁尽きたがゆえに、今、かかる憂き目を見らるともいう。さすれば……」

「……」

「しかし、のう、門脇殿」経盛は弟に問いか

けた。

「伝え聞くとくところでは、討ち死にした一門多くが、阿弥陀の浄土を信じて念仏して戦死したそう。生け捕られた本三位殿はたつての願ひ叶つて、院の許しを得、法然上人に對面懺悔が叶つたという」

教盛は兄を顧みた。それにはかまわず経盛は海に目を向けたまま、

「ここに来て、われらには法然上人のことがしきりに思い出される。世に稀な聖でおわした。そなたもお上人にお会いしたいとは思わぬか」

経盛は振り返って教盛の目をみつめた。

(つづく)

江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第十三回

田園編



大江戸ウォーカー

森清鑑

千代ヶ崎から祐天寺

大円寺を右手に険しい行人坂を登る。左側には、茶屋、民家が並ぶ。富士見茶屋、浄覚寺そして永峰町。登り切ると品川から来る道に出る（JR山手線）。前方右一帯は、森伊豆守の屋敷森（一万七千坪）。左は、行人坂と並行して登ってくる権之助坂（目黒駅前）。

権之助坂

権之助坂ごんのすけは、江戸初期にはなかった。斜面の田畑であった。当時、目黒不動に参詣するには行人坂を通るしかない。しかし、この坂はあまりにも険しい。そこで、江戸中期に処の名主、菅沼権之助は、私財をはたいて、農作物運搬用の、ゆるやかな坂道を造った。人々のためによかれと思う一念。彼はこの坂を新坂、目黒川に架かる橋を新橋（現在も同じ）と名付けた。道幅は、行人坂よりも狭い。だが、幕府は届け出もなく、勝手に道を開拓

したという理由で権之助を死罪とした。本来、江戸に入る道は、曲がりくねり、先が見通せないものが多い。通行の利便よりも、いざというときの防御が重んじられた。徳川幕府が開かれて百年。人々は太平の世を迎えている。しかし、道路政策は変わらず、権之助に厳しい処置が下された。彼は、刑場に行く日、自分が切り開いた坂道を登り切ったところで後ろを振り返り、右下方に見える、田道でんどうの自分の家を指さし、ニコッと笑って堂々と刑場に向かったという。刑罰を受けた理由にもう一つ。彼は、地元農民が尊敬する、徳のある名主であった。厳しい年貢取り立ての現実から民衆を救うべく、直訴したという。この二つのことが彼を刑場の露と消える運命に導いたといわれる。しかし、死後、多くの人々が、この坂の恩恵に浴することになる。いつしか、処の人々は、畏敬をこめて「権之助坂」と呼ぶようになった。その道幅は、昭和に入ってから狭く、南側にちらほら家が在っただけ。

夏にはホタルが飛び交い、それは美しい光景であったという。戦後、坂は大幅に拡張され、目黒の主要幹線道路となる。

千代ヶ崎

権之助坂を登り切り、直進すれば白金台町である。ここを左（北）に曲がる（目黒駅前、恵比寿方向）。品川より通じる、この道が江戸時代の道。道の左側に沿って、島原藩松平主殿頭下屋敷が続く（山の斜面で権之助坂から道沿いの、細長い二万一千坪の土地）。道と並んで右側には清冽な川が流れている（三田用水。その流れは、目黒駅から白金方向に転じていた）。特に川敷きが美しい光景。この道は、山の尾根に当たり、「夕日の岡」の延長にある。風光明媚なこと著しく、歩けば左手に富士山、振り返れば品川の海。ここから防衛省技術研究本部、官舎にいたる一帯を江戸の人々は、千代ヶ崎と呼んだ。松平主殿頭の屋敷は、「絶景観」と形容されている。

庭には長さ約百メートル、幅約四十五メートルの大きな池があり、山肌から湧き出る水が何段もの滝を形成し、池に注がれていた。その美しい光景は、広重が描いているとおりである。話は、南北朝時代に遡る。新田義貞は、足利尊氏の策にかかり、六郷川（玉川）矢口の渡にて伏兵に遭遇、あえない最期を遂げた。愛人、千代はこの知らせを聞くと悲嘆のあまり、池に身を投じる。いつしかこの池は千代が池と呼ばれるようになった。池は古くから存在していたのである。この辺り一帯まで、本来の地名は、槍ヶ崎。目黒氏が砦を築いた処である。千代伝説から人々は千代ヶ崎と呼



◆広重「江戸名所百景」千代が池

ぶようになった。

爺々が茶屋

道を進もう。左に富士、右沿いに美しい三田用水の流れ。紅葉が映える。主殿頭の敷地が終わる辺りから道は左に切れる（自動車学校。二股の右道は江戸期畑）。川は古道に沿ってどこまでも続く。やがて、左手にスタジイの古木（現在もある）。その先に、赤松に囲まれ、一軒の茶屋がある。富士見茶屋。座ると正面に富士。じっと見つめると富士山の色は刻々と変わり、千変万化する。広重の絵は、右に茶屋、中央に曲がりくねって下降する茶屋坂、広々とした畑地で馬を引く農夫、その上は祐天寺の森か、続いて丹沢山塊（一番左が大山）を描いている。この茶屋の主人は彦四郎。三代將軍家光は、この辺りの鷹狩りを非常に好んだ。その折りには必ずこの一軒茶屋に立ち寄る。春夏秋冬の飽きることのない景色と彦四郎の料理を楽しむ。彼は彦四

◆茶屋坂柱標識



郎の素朴な人柄を愛し、「爺、爺」と呼んで親しんだ。それがいつしか「爺々が茶屋」と呼ばれることになる。八代吉宗も鷹狩りが好きで頻繁に訪れる。その後の歴代の將軍も続く。そして銀一枚を置いていく。茶屋も彦四郎の末裔が受け継いでいく。江戸後期にはこの辺りに数軒の茶屋があったようで「茶屋場」と記されている。

爺々が茶屋の位置は、先に述べた旧道が現代の茶屋坂（清掃工場と防衛省の間を上がる）にぶつかる地点。江戸の茶屋坂は、ここから左にくねって降り、清掃工場を抜けて目黒川



◆広重「江戸名所百景」爺々が茶屋

田道橋に出る。

富士塚

江戸の道は三田用水を伴って、茶屋場から今の防衛省官舎、技術研究所敷地を突っ切って槍ヶ崎（槍の穂先のような急峻な台地）に向かう。すると別所坂（この辺りに鎌倉時代目黒氏の居館があったという）。その手前に目黒新富士があった。江戸時代霊峰富士を仰ぐ、富士講が盛んだったが富士登山は容易ではない。そこで山に行けない人々のために、江戸各所に人造の富士塚が築かれた。この新富士は、蝦夷、千島列島の探検家として名高い、近藤重蔵が、槍ヶ崎の抱え屋敷に造ったものである。二、三の人が小山の頂から本物の富士山を拝んでいる。下に流れる川は三田用水である。川伝いに道が描かれている。この道をそのまま進めば、目切坂に出る（駒沢通り、槍ヶ崎交差点付近）。そこに在ったのが元富士（東横線中目黒駅から代官山駅トン

ネルに入る前の左側の小高い丘。マンション）である。目黒川から迫り上がった、この丘も絶景であった。文化九年（一八一二）、伊右衛門と富士講の信者がこの塚を築いた。こちらの方が近藤の富士より九年ほど前に造られたので、人々は元富士と呼んだ。広重の絵を見ると、小山の下に縁台が設えてあり、数人が花見を堪能している（この辺り、おそらく東横線の線路）。古道と三田用水は寄り添ってさらに上に進む（代官山ファッションのメッカ、旧山手通。青葉台西郷山公園）。

落語におなじみの「目黒のさんま」がある。殿様が目黒に遠乗りに出た。一軒の茶屋から煙が上がっており、香ばしい臭い。空腹。「それは何だな」と殿様。ほんのり焦げた焼魚を食してみると、あぶらがのっており、実にうまい。殿様感激して「この魚は何と申す」。「へえ、秋刀魚といいやす」。その後、殿様、さんまの味が忘れられず家来に所望する。すると家来はさあ大変とばかり、魚河岸に飛ん

でいき、新鮮この上もない秋刀魚を仕入れる。旬のあぶらがこつてり。これでは殿のお腹にさわる。あぶらも小骨も抜き、秋刀魚は見る影もなくなる。殿様、食すと味も素っ気もない。「うむ、これがさんまか？このさんまは、どこから取り寄せた？」。「日本橋魚河岸の一级品です」。「それでわかった。さんまは目黒に限る」。いかにも爺々が茶屋の光景が目に見え浮かぶ。落語家によっては元富士が舞台になっている。殿様は松平出羽守（出雲）であったりする。將軍家光ともとれる。目黒でさんま？しかし、江戸期、目黒の農民は、農産物を舟に積んで目黒川を下り、品川宿で売りさばいた。帰りに芝河岸で旬の魚を積んで帰る。目黒、品川間は舟ならじきである。

茶屋坂を目黒川に降りる。四方八方、田と山である。田道橋を渡ると再び田畑を縫って急な馬喰坂（風雨にさらされ、地面に穴のあった状態を土地の方言で「ばくろ」といった）を登る。長い坂の右手はすべて長泉院の壁。

◆広重「江戸名所百景」元富士



◆広重「江戸名所百景」新富士



開山は、増上寺第四十五世大玄和上（一七一）。ここは浄土宗の律院（僧侶を育成するための寺院）である。創建三十年後には、広大な寺領に発展。『江戸名所図会』を見ると自然の、野趣豊かな光景が描かれている（現在、往時に比べ小規模になったが、格式は



◆「江戸名所図会」長泉院

高く、お堂と現代彫刻美術館がある。馬喰坂を登り切ると十字路になっている。

右に行けば祐天寺、左は目黒不動、真っ直ぐ行けば碑文谷村。その左角に江戸期（一六八〇〜一七四二）の庚申塔が四基立っている（当時、この地は庚申信仰が盛んで、長寿、豊作を祈り、飲食しつつ夜を明かしたという。中でも板碑型庚申は三猿浮き彫り、戒名が刻まれている珍しい例）。この左右の道は古くから庚申道（田道庚申塔群にも行く）と呼ばれ、今は細い道だが目黒不動への幹線道路であった。庚申塔を左に見て右の道を取る。長泉院門前を通り、さらに歩くと左手に再び庚申様がある。藤の大木があったため、処の人は「藤の庚申」と呼んだ。一六八四年のものである。道には江戸の空気が漂っている。その少し先、右手「なべころ坂」（鍋が転がり落ちるほどの急な坂道）。ここからは今まで歩いてきた、千代ヶ崎、爺々が茶屋方面の丘が一望できる。さらに行くと、もう一本右に

下る道がある。降りたところが中目黒八幡神社（中目黒村の鎮守。創建は一六六〇年頃。境内は古木が茂り、今でも飲める湧き水がある）。そして祐天寺。一段と広い道に出る（けこぼ道、駒沢通り）。広大な門前を、馬に乗った武士、桶を担ぐ人が行き交っている。

【参考文献】

「広重の大江戸名所百景散歩」人文社



◆馬喰坂上の庚申塔群



◆藤の庚申

新年賀謹

平成二十年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十七世

坪井俊映

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山清浄華院

法主 伊藤唯眞
執事長 吉川文雄

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

浄土宗宗務総長

稲岡康純

浄土宗大願寺住職

神谷英敏

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二一
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二一

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

函館
称名寺

〒040・0055 函館市船見町十八・十四
電話〇一三八（二三）〇五七四

清水湊

忠高山
實相寺

〒420・0839 静岡市葵区鷹匠
二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四（二五二）三六七三
FAX〇五四（二五二）三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174・865 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 **麻生諦善**

淑徳学園中学校・高等学校

校長

川添 崇

塩竈市
雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844・1411 嬉野市塩田津中町

学校法人 浄土宗教教育資団
学校法人 東海学園

理事長

水谷幸正

弘経寺住職

(財)浄土宗報恩明照会理事長

金田進徳

〒302・0023 茨城県取手市白山二・九・二八

れんけいじ
蓮馨寺 吞龍上人祈願所
毎月八日縁日、第四日曜享経会

糸原恒久

〒350・0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二六）〇六七六

養運寺

田中光成

〒194・0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三（三五八三）三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三・八・一

愚鈍院 こつぶがや文庫主

**中村真道
中村瑞貴**

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇二二（二五六）六〇五七

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399・4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話 〇二六六(五二)一九七〇
FAX 〇二六六(五二)三四四六

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158・0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話 〇四八(五四二)〇二二七

〒112・0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話 〇三(三八一四)三七〇一(代表)

願行寺住職

佐藤成順

〒140・0004 品川区南品川二・一・一二

天光院

真野龍海

<http://www.evamne.jp/tenkoin/>
ryumano@nifty.com

光円寺住職

佐藤良純

〒112・0002 文京区小石川四・一二・八

骨仏の寺

一心寺

〒543・0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話 〇六(六七七一)〇四四四

定義如来

西方寺

〒989・3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話 〇一一一(三九九三)一一〇一一
HomePage: <http://www.johgior.jp/>
E-mail: saihoushi@johgior.jp

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

光取寺

大室了皓

〒141・0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三(三四四二)八三八四

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・二一・二八
電話 〇四六七(二二二)〇七〇三
FAX 〇四六七(二二二)五〇五一

静岡 宝台院

白本尊阿弥陀如来

住職 野上智徳



浄土誌上句会

●量

〔特選〕
測量の杭に止まりし冬雀

山口 信子

宅地造成だろうか。相変わらず山を削り田畑を埋めて、団地が増えて行く。冬雀とあるから田んぼかも知れない。秋は稲をねらって来たものだ。稲雀である。次の秋には、もう田んぼもなくなっているのだ。

〔佳作〕
分量を正し日課のりんご汁

河合富美枝

山と積み量の知れざる納め札

中島富士子

目分量漁師に買いし海鼠かな

浜口 佳春

●舞

〔特選〕
舞衣裳すらりと吊し文化の日

井村 善也

文化の日を中心に、いろいろの催しものが立て込んでくる。この句のもその一つに違いない。今日のために備えて、稽古も積み衣裳

も整えた。もう本番を待つばかりである。
「すらりと吊し」が生きている。

〔佳作〕酔うほどに剣舞出でたり冬の宿

内藤 隼人

舞踏家の黒きタイツや月の影

先崎 涼子

秋晴れや退院の日に見舞い客

石原 新

●自由題

〔特選〕

柚子風呂や隣人いつも同じ歌

近藤アツ子

冬至の日に柚子風呂に入ると病気になるな
という。まだ通っている言い伝えである。
作者も今たつぷりとひたっている。隣からは
鼻歌が聞こえてくるが、おはこなのか、いつ
も同じ歌ばかりである。

〔佳作〕とんびりに山の音聴く朝餉かな

佐藤 雅子

やや寒くやや暖かく日の暮れぬ

寺下 忠至

一日の始まり山の百舌騒ぐ

村上 青女

読者の声

表紙の美しいイラストいつも楽しく拝見しています。特に九月号からの京都のいろいろな御本山の絵は、昔、団体参詣したときの思い出と重なり、私にとって、とても懐かしき嬉しいものでした。いまは足が少し不自由になり旅行もままならない私ですが、毎号、「浄土」が送られてくるのが待ちどおしく、楽しみにしています。（山形・女性 匿名希望）

石丸晶子先生の「法然上人とその時代」が再開になってとても嬉しいです。あんなに栄耀栄華をきわめた「驕る平家」が壇ノ浦に追い詰められて、公達それぞれの「もののあはれ」のようなものを感じます。こうした無常

観のなかからお浄土への希求が生まれていくことがよく理解できます。

法然上人がなかなか登場されないのでありますが、それもむしろ楽しみのひとつになっております。ゆっくりとお話の展開をお待ち申し上げます。（横浜 一読者）

関谷子先生の「会いたい人」のファンです。毎回個性あふれる俳優さんたちが登場し、昔疑問に思っていたことなど、ああそうだったのかと合点したりするところも一杯あってドキドキします。大女優、杉村春子さんの、とある一面とか、大地喜和子さんの隠された逸話など、それぞれの俳優さんの思い出話がとても面白く、まるで優れた小説を読むような気分です。これからも、たくさんの人々にお会いし、お話を聞きだしてくださることを切に希望いたします。（奈良 七八歳 男性）

編集部より

「浄土」ではみなさまの、お便り、ご意見ご感想を常時お待ちしております。これからもふるって御投稿のほど、お願い申し上げます。

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

（季語ではありません）

新味自由題

締切・二〇〇八年一月二十日

発表・『浄土』二〇〇八年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

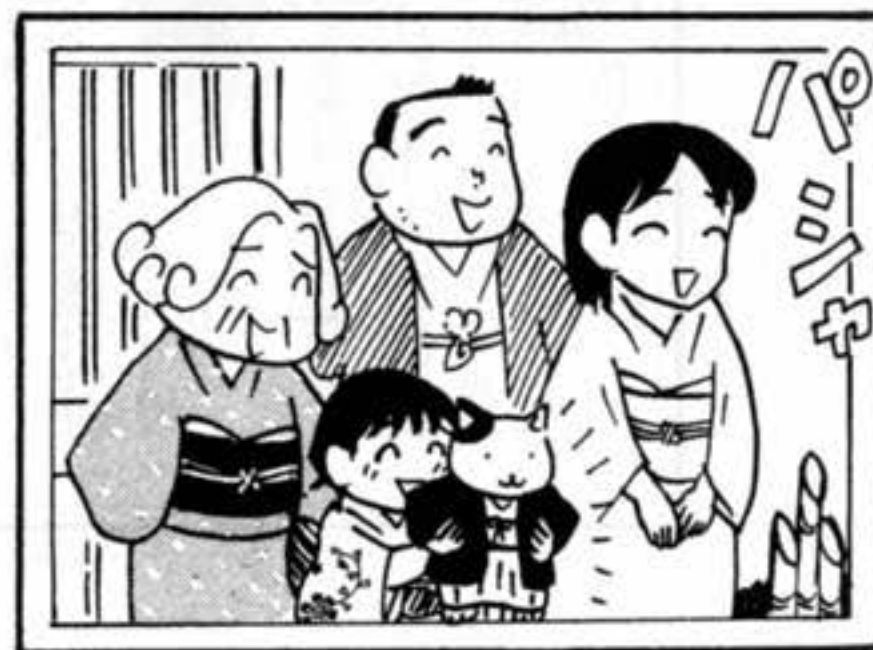
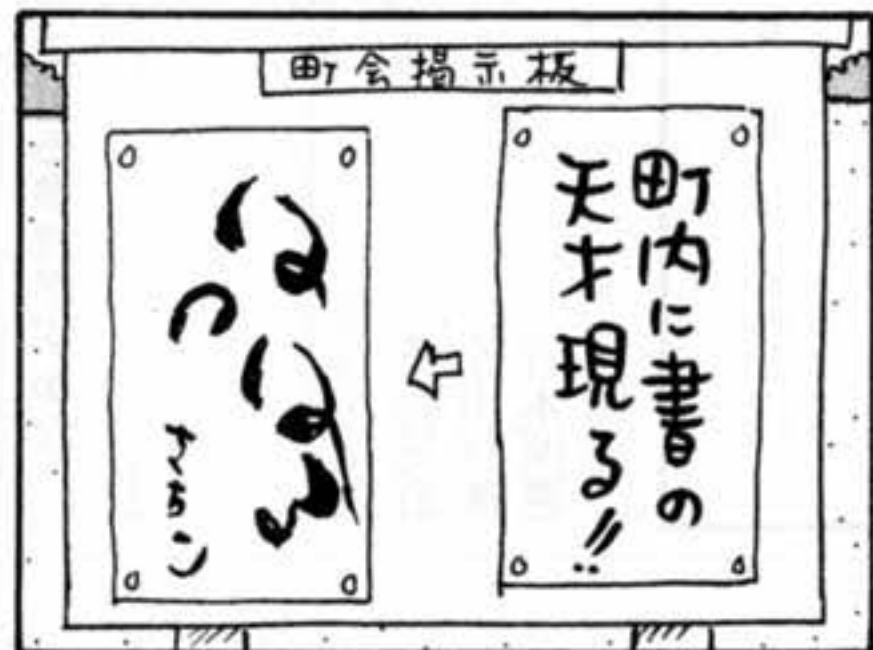
●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

かまちのろう



編集後記

風強く身を縮めてる福寿草

岱潤

正月早々だが、法然上人の次のお言葉が最近益々現実味をおびてきた気がしている。「かなしきかなや 善心は年々にしたがいてうすくなり 悪心は日々にしたがいて いよいよまさる」

年進む毎に末法はどんどん深くなってきたのだろう。人間の心がどんどん悪くなってきたことを、ニュースを聞く度に思いを強くしている。

年改まることによつて、リセットボタンを押すかのように、ニュートラルな気持ちにさせてくれたのは、もう何年も前のことだった。ここまで悪意強き人々が増

えてくると、楽天的にはなれそうもない。

しかし佐賀のがばいばあちゃんは一っらいことは夜考えるな」と言っていた。また外山滋比古氏は朝飯前とは、寝て疲れをとったあと、腹に何も入っていない状態が頭には最高の状態であることから、どんな難しい問題も朝飯の前に考えると、簡単に解けてしまうことを力説していた。徹夜して考え抜いても、いい答えは出ないかもしれない。

力を抜くこと、阿弥陀仏に全てを任せること、そう法然上人は教えてくださっている。ハンセン病療養所の佐川修氏は「要求無きところに成果なし」と仰った。夢を見ることを忘れてはだめだ。オノヨ

ウコ氏が言った「二人で見る夢はただの夢だけど、みんなで見える夢は必ずかなう」と。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十三巻十月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年十二月二十日

発行 平成二十年一月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

連載

教えと法話

壽命長短

じゅ みよう ちよう たん

壽命に長短あり
無量壽經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

命は長短なれど、人は普く世に尽くす。
よつて寿ぐ命という。

誕生から自然死までの生物の生存年数は、一様ではありません。身近な生物の平均生存年数は、犬十二年、猫十八年、馬六十年、セミ（成虫）二〜七日、サケ四、五年、ゾウ五、六十年、ツル四十二年。

壽命とは、仏教では、生命が持続していることに加えて、体温、意識が維持されて充実している

意味です。死とは、この三要素が身体から剥離することです。阿弥陀仏は、原語に基づき無量壽仏と申しますが、三要素の調和を願う人の願いが包まれていきます。

人が日々全力で人や社会に尽くすことが、生涯に充実感をもたらし、それが長命を寿ぐ意味であります。

法然上人鑽仰会の



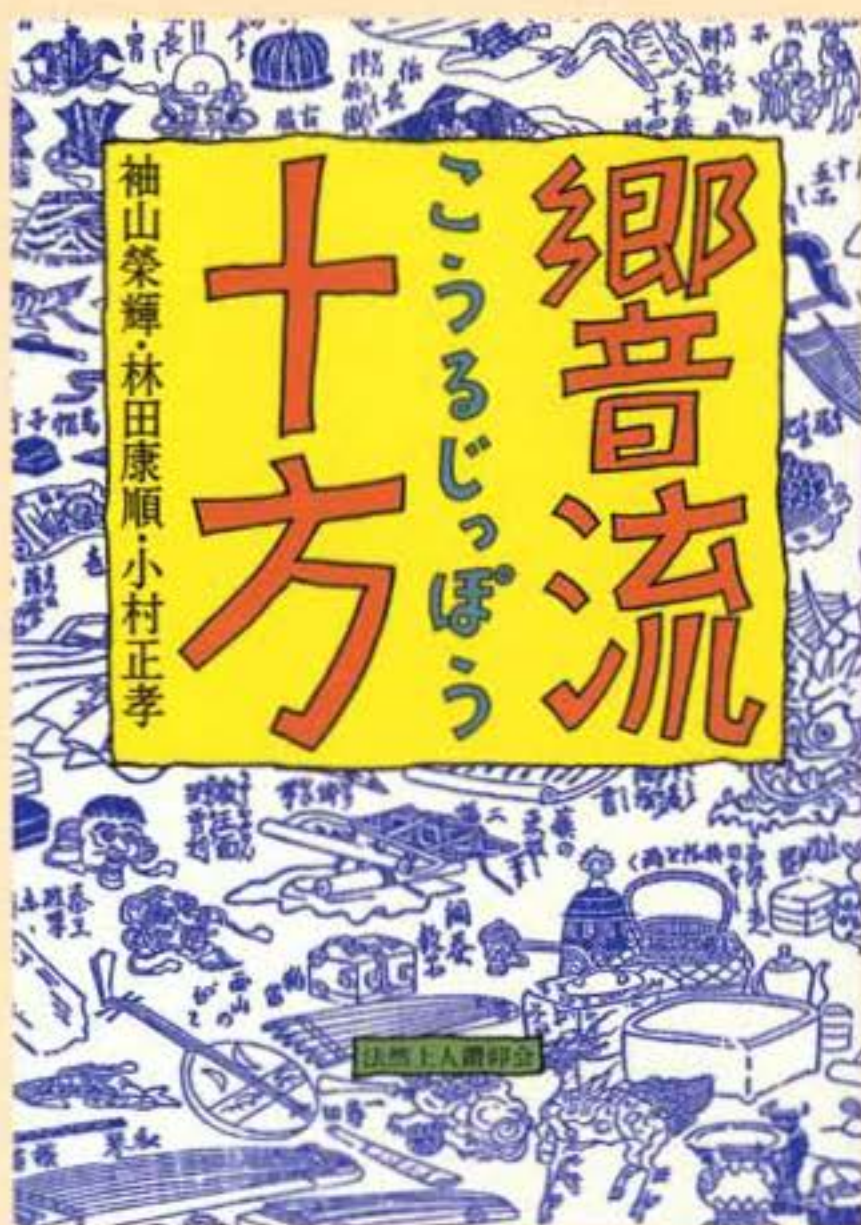
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より